

～ 昨日の風 明日の風 ～
**経営コンサルタント
 独白録**

【第104回】 「^{しつけ}躰」の本質と喪失



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、㈱経営改善支援センター（福岡市、URL: <http://sien.co.jp/>）代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家として、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

「躰」という言葉は漢字ではありません。例えば「峠」や「鯉」などのように日本固有の文字でこうしたものを国字と言います。つまり日本固有の文字であり、その背後にある意味は日本人にしか理解できないものです。

「躰」が不要だった時代

日本は極東の島国で、なおかつ温帯湿潤気候に属していて世界に比べて降水量の多い国です。そのため、木材や紙を使って家屋を作ってきました。明治期に日本を訪れた西洋人が襖や障子を見て驚いたと言います。そして多くの日本人は日常生活を4畳半いや6畳という狭い空間で行っていました。そうした狭い空間で生活をするためには知恵が必要でした。夜寝るときには布団を敷き、朝目覚めたらそれを押し入れに仕舞い、ちゃぶ台を出して食事をする。そのちゃぶ台を片付けて居間として使用する。今風に言えば日常空間をリバーシブルに使っていたのです。これは大昔のことではなく、昭和30年代位までは当たり前の事でした。

そうした生活様式の中では「ひとつのことが終われば、きちんと片付けて次のために備える」ということが当たり前でした。脱いだ服は畳んで仕舞う。使った食器は洗う。使った道具は元の場所に戻す…。そうした事を当たり前のように行えないと生活が送れなかったのです。そうした時代には、あえて声高に「躰」をする必要はありませんでした。

日本人の思想的背景

極東の島国である日本人は物事に対して大きく3つの思想的背景を自然に所有していました。社会の中で生きるためには礼節を知らなければならず、挨拶の仕方や身綺麗な格好、目上の人に対する態度などは「儒教的教養」が必要でした。また、人生について考える時には、自然災害の多い国であったため、自然と調和する生き方や自然を敬うと言う「神道・老荘思想的感覚」を持っていました。毎年の台風や豪雨、巨大地震や津波に襲われた歴史の中でいかに自然とともに調和しなければならぬかということが精神の深くに存在していました。哲学的なことを考える時には、生と死について教える「仏教」が身近なところがありました。こうした日本固有の思想的背景によって日本人は生きる上での知恵として「躰」というものをごく自然に作り上げてきたのです。

「躰」の喪失

極東の小さな島国で、連綿と受け継がれてき

た風土に応じて発達してきた「躰」が失われ始めたのは1964年（昭和39年）東京オリンピックが開催されてからのことです。高度成長のもとで豊かになった国民生活の中に「ベッド」という西欧の物が日常生活に入ってきた途端、それまでの質素で節度ある生活様式が一変しました。それまでは1つの部屋をリバーシブルに使うため、メリハリの利いた行動を当たり前に行っていた国民が「この部屋は寝室、この部屋はダイニング、この部屋はリビング」とセパレートな空間を手に入れたことにより節度が失われ始めました。毎朝布団を片付ける必要はなくなり、セパレートな空間なので着ていた物をいちいちものを畳まなくても構わない。居間で交わっていた家族の会話が減り、世代を超えて伝えなければならないことが伝えられなくなった…。こうした変化の中で「躰」という日本独自の精神様式が日常生活や社会の中から消えていきました。

個人主義の台頭と組織運営

- きちんとした挨拶ができない。
- 服装がだらしない。
- 会社のものを大切にしない。
- 使ったものをきちんと元の場所に戻さない。
- 会社の決めたルールを守らない。
- 仲間を大切にしない。
- 会社や仲間の悪口を言う…。

「躰」という共通の社会規範が失われたことにより、組織の中に様々な問題が発生し、それを解決する方法が見つかりません。本来、家庭や学校や育ってくる社会的環境で身に付けなければならなかった当たり前のことがこの国から消えてしまっているのです。

自社における「規範」

「誰も見ていなくてもお天道様は見ている！」 「石の上にも3年！」 「人の振り見て我が振り直せ！」 などと言う言葉はすでに若い世代にとっては死語となりつつあります。そうした言葉の意味や生きる上での知恵を与えられる機会を失った世代が増えてきています。世界標準（グローバルイズム）の名の下に「今だけ、金だけ、自分だけ」という風潮がないわけではありません。改めて自分たちの所属する組織で新たな防波堤を築かなければなりません。そのために必要な自社における「躰」の再構築が必須です。